

## 1 プロローグ

腕が引きちぎれるのではないかというほど痛みすら、とうに麻痺していた。それでも、伸ばした腕の先にあるその手を離すわけにはいかなかった。

罵りの声も諭す言葉も、なにも耳には届かない。耳にはただ、大切な人の名を呼ぶ自分の声だけが間断なく響いていた。

それでも、その手は、その声は、なんと無力なのだろう。

ほんの一瞬の力の緩みと、誰かがフォニの身体を後ろへ強く引いたのは同時だった。手に触れていた熱が、すると指の隙間を抜けて離れていく。

フォニは一層声を張り上げて叫んだ。手を伸ばそう

とやみくもに暴れるが、たくさんの頑なな手に片っ端から封じられた。

目を見開いて正面を見る。

伸ばした手を虚空に彷徨わせ、茫然とフォニを見つめる少女がいる。

まるで鏡のようだ。唯一違うのだとすれば……。

少女の頬をすると伝って、涙が流れていた。茫然と見開いた瞳から泉のように湧き出す水が、フォニにははっきり見えていた。

暴れたがための動悸とは別種の衝撃が、フォニの胸を強く突く。

身体中が熱くなった。体内を巡る血に乗って、衝撃が熱となって手足の指先にまで伝播したかのようだ。

その熱を吐き出すかのように、フォニは全身全霊で叫んだ。

「泣かないで！ 泣いちゃだめ！……ザクリ！」

フォニとザクリ。

同じ日に生まれて共に育ち、互いに両親を亡くしてのちは二人手を取り合つて暮らしてきた。小さな村の片隅で二人、いつまでも一緒にいるだろうと信じて。

そんな二人の平穩な日常は、悲痛の声と涙を最後に、幕を閉じた。



その男が、多くの従者と豪華な輿を伴つて村の入り口へ立ったのは、数日間に渡る長雨がやんだ翌日のことだった。

街道から遠く離れた片田舎の村へ、よそ者がやつて来ることは滅多にない。男の訪問に、村中の空気が一変した。

しかし、そのときのことをフォニは知る由もなかつ

た。数日ぶりの晴れ間に、ザクリと一緒に家のはたを流れる小川へ出て、洗濯をしている頃だった。

男は、先触れもなく二人の少女の前にやつて来た。後ろにはぞろぞろと従者と村人を従えている。

「ザクリ」

村の長が、フォニの傍らで身をちぢこませた少女の名を呼んだ。その固い響きにフォニは不穩なものを感じ、さり気なくザクリを後ろへ庇う。

「こつちへ来なさい。……フォニ、邪魔をするな」

フォニは敵意を込めて村長を睨み据えた。そんなフォニの態度に、村長は煩わしげに眉根を寄せる。

「邪魔をしに来たのはどつちだつていうの」

フォニとザクリ、そして二人の前に立つ大勢の人々の間には、まるで見えない境界線があるかのようだった。話し声の充分届く距離を置いて、互いに前へ出ようとはしない。

「フォニ、おまえには関係のないことだ。家へ戻つて

いろ」

「ザクリはわたしの家族だ。関係ないことなんかじゃない」

「そうやってザクリのことをなにかも自分の思いのままにしてきたのだろうが。いつまでもそんなわがままが通じると思っているのか」

「違う！ あんたたちがザクリの望まないことを強要しようとしているんだ。わがままなのはそっちの方だ」  
フォニには最初から相手の話を聞くつもりなどなかった。ザクリは彼らを怖れている。フォニにとつて、彼らを拒むのにそれ以上の理由など必要ない。

村長は老いた顔に青筋を浮かべ、目を吊り上げた形相だ。フォニが受け入れれないのと同じように、村長をはじめとする村人たちも、フォニには決して好意的ではない。ことあるごとに水と油となつて互いに反発し合うのだ。

フォニが村長の言葉をことごとく突っぱねるのを見

かねたのかもしれない。ようやく訪問者である男が口を開いた。

「家族を思うあなたの心には敬意を表する」

静かな、けれどはつきりと通る声だ。「敬意を表する」などという堅苦しく回りくどい言葉を、フォニは初めて聞いた。

「しかし、言うなればそれはあなたの一人の感傷に過ぎない。我々はもつと大きなもののために、その方の力を必要としているのだ」

「大きなもの……？」

背後でフォニの腕を掴むザクリの手が、きゅつと縮こまった。フォニは相手に向かって身構えながら、心の中でザクリに語りかける。大丈夫。あなたの力は誰にも使わせない。

「ザクリ様には『帝都』へおいでいただく。 우리가 皇帝陛下のために」

さも決められた事項であるかの如く、男は断言した。

「帝都」。ここから北へのぼり、山脈を越えた先にある広大な「帝国」。その心臓である都。

「帝国」のことは、フォニでも知っている。この世で一番大きな国家であり、周辺の地域を飲み込みながら拡大を続ける魔物のような存在。

フォニたちの暮らす「エリヤ」も、かなり昔に帝国への影響下へと入っていた。

「エリヤ」は「オリーブの国」とも称され、かつては太陽の光がふんだんに降り注ぎ、緑の恵み豊かな風土を誇っていた。緑の平野に陰をなすオリーブの木々に、過去の人々は理想郷の風景を思い描いたという。

しかし、それらすべては、フォニたちが生まれる遙か昔のことだ。

今この世界に、理想郷など存在しない。

「涙の聖女」

男は、淡々と、フォニがもつとも嫌う言葉を口にした。

「その涙は、見る者の心の滓をことごとく溶かし、あらゆる穢れを浄化する。あるときは争いを止め、あるときは邪に満ちた心を改心させた。……ザクリ様、あなたを必要とする方が、『帝都』におられる」

男の目は、立ちほだかるフォニを透かして、ザクリだけを見ていた。

「ふざけたことを言うな！」

苛立ち紛れに、フォニは声を張り上げる。

「あんたたちはどれだけザクリを泣かせれば気が済むんだ！ どれだけ悲しめたら満足するんだ！ 他人の苦しむ姿を見て喜ぶのも大概にしろ！ この、人でなしども……っ！」

フォニが言い切るか寸前かのところで、突然、こめかみに痛みが走った。ころん、と小石がフォニの足元に不自然に落ちる。背後でザクリが息を呑む音がした。

「黙れ！ 悪しき魔女め！」

村人たちの間から、ヒステリックな罵声が飛んでき

た。それが引き金となって、他の村人も声を上げ始める。

「魔女だ！ おまえは聖女をたぶらかして涙を独り占めしているんだろ！」

「人でなしはどっちだってんだ！ ザクリから離れな！」

「聖女を救え！ 魔女から救うんだ！」

ざわめき色めき立った村人たちは、それまで保たれていた見えない不可侵の境界を、まるで津波のように破ってその内側へと押し寄せた。

羊飼いの男、染め物小屋の女、木工職人の若者から菓草師の老人まで、フォニの知る人々が、このとき初めてフォニに牙を剥いたのだ。

フォニは咄嗟にザクリの両手を強く握った。誰かがフォニの身体を乱暴に引っ張ったのは、その直後だった。

人々は、寄り添うフォニとザクリを取り囲み、二人

を引き離そうとめちやくちやに手を伸ばしてくる。フォニの向かい側で、誰かがザクリの肩口を捕えた。

誰かが、フォニの片腕を強く打ち、痺れた手を強引にほどくと、二人を繋ぐのは互いの片腕だけになった。

それすらもやみくもに引っ張られ、寄り添っていた二人は徐々に引き離されていく。

フォニは、はつきりと恐怖を感じた。

確かにフォニは村の中でも爪弾き者だった。理由はよく分からぬ。だが、それでも村の中で生きてきた。それが「生きていた」のではなく「生かされていた」のだと、ようやく思い至る。

村人たちがその気になれば、暴力でフォニを排斥することなど容易いことだった。ただ、今まではそこにまで至る理由がなかっただけのことだ。

「ザクリっ！」

フォニは呪文のようにその名を呼んだ。そうしなければ、絶望に押し潰されてしまいそうだった。

だけでも、それでも、フォニの中に芽生えた一つの結論は消えない。

フォニは、無力だ。

そのとき、それまで固く手を握り返していたザクリの手から、ふっと力が抜けた。ぴたりと触れ合っていた手に隙間が生まれ、それはあつという間に亀裂となり広がる。

「ザクリ！」

呪文はもはや手遅れだった。

もう一度その手を掴もうと身を乗り出すが、いくつもの手に囚われて敵わない。

絡まる手を振りほどこうとフォニがもがく間に、ザクリは男の伴ってきた輿に押し込められてしまった。

男は、用は済んだとばかりに踵を返し、従者と共に背を向け足早に去っていく。ザクリを乗せた輿もその後ろに続き、フォニの視界から消えていった。

フォニは声が枯れるまで何度も、消えてしまったそ

の名を呼び続けた。

村人が一人また一人と、フォニを置いて去っていく間も。最後の一人が、フォニに何事かを語りかけ離れていく間も。フォニは、引きちぎられた絆から絶えず零れる痛みを悶えて、何度も同じ言葉を唱え続けた。

◆ ◆ ◆

昨日の出来事がすべて夢であったかと錯覚するほど、翌朝には村はなにこともなかったふりをしていた。

朝の挨拶を交わす村人たち。いつも通りフォニを遠巻きにして、けれどザクリの名前だけは誰も口にしない。ザクリに与えた「涙の聖女」という称号も。

フォニにはそれが、最初からそんな者はいなかったと主張しているように思えてならなかった。そう主張

していることが却って、存在しないはずの存在を際立たせているような。

村人たちがどれだけザクリのことを消したがっても、フォニとザクリが暮らした家までも侵すことはできない。

そこには、二人が一緒に暮らした証明が至るところにある。二人分の椅子、食器、衣服、寝具……すべてが二人分だ。

その夜、ザクリはベッドの上に座って、目を閉じていた。窓から差し込む月の光は臉に遮られ、暗闇がフォニの前に広がっている。

ふと暗闇に、一筋の光る糸が、細く長く浮かび上がる。糸は、フォニの鼓動に合わせてかすかに明滅しながら、暗闇の彼方まで続いていた。

フォニは暗闇の中でその糸に触れ、糸に添って歩き始める。漠然と、向かっている方角が北の方だと感じた。

やがて、フォニは糸の先に球形の光を見つける。暗闇の中で寂しそうにまたたいている。

「ザクリ」

呪文のように唱えると、一瞬ののちに光はザクリの姿に取って代わっていた。

寂しそうに、申し訳なさそうに、ザクリはフォニの前に佇んでいる。

フォニとザクリは同じ日に生まれ、以来、片時も離れることなく二人一緒に育った。

そしていつの頃からか、二人には、二人にだけ分かる、見えない繋がりがあることに気がついた。目を閉じて集中すると、互いの居場所が漠然と分かるのだ。

意思の疎通ができるかどうかは、現実には離れている距離によるようで、フォニの声がザクリに届くことがあれば、ザクリの考えがフォニに読みとれることもあった。

しかし今は距離があり過ぎる。フォニの声はザクリ

には届いていないだろうし、ザクリの考えは、今ザクリが見せている表情から察するしかない。

だが、それだけで良かった。こうしてザクリの存在を確かめることができるなら。

フォニにとつてはザクリがすべてだ。

幼い頃、まだザクリが「涙の聖女」とは呼ばれず、その涙の力に、村人たちが驚いていた頃。フォニはザクリを命を賭して守ろうと誓った。

以来、フォニにとつてザクリは生きる理由そのものになった。ザクリを失えば、それはフォニ自身が命を失うに等しい。

だからこの光の糸は、まさしく生命線なのだ。

二人と、二人の命を繋いで、糸は仄かに光り輝く。



さらに短からぬ時間が流れた。

村は変わらぬ日常を繰り返しながらも、少しずつ変化を見せていた。

村が、少しずつフォニを受け入れ始めている。

村の中でザクリを失い、すっかり独りになったフォニのことを、村人たちは最初はさり気なく、徐々にあらさまに気遣うようになっていた。

独り暮らしのフォニへ食事を届けたり、村の寄り合いへフォニを誘ったり、そのやり方はさまざまだった。

今までフォニを散々悪しざまにしてきた者たちが、同じ口で、同じ手で、フォニを村へと引き入れようとしている。

そのことに強い違和感を覚えながらも、フォニは特にそれらを拒むことはしなかった。届けられた食事は



素直に受け取り、誘われれば外へ出ていく。

彼らはザクリを余所者へ売り渡したことは許したが、今の彼らにはもう、ザクリへ酷い仕打ちをするすべもない。そう思えば、いつまでも頑なに拒むことが馬鹿ばかりかしく思えてくるのだった。

絆を引きちぎられた傷は、徐々に傷跡へと変じていく。あの頃の苦痛は記憶の中で少しづつ風化していく。

それでも、フォニがザクリを忘れる日はなかった。

毎夜、眠る前の少しの時間、目を閉じて光の糸をく。そうしてザクリと出会っては、その様子に一喜一憂する。

今や、二人の距離はとても遠く、フォニも長く糸を辿っていかなければザクリのもとへは辿りつけなかった。そうやって辿り着いた先で、ザクリの浮かべる表情を見ては、一喜一憂する。

最近のザクリは元気がなかった。落ち込んだような表情をしていることがほとんどだ。それでも、フォニ

と目が合うと苦し紛れに笑んで見せる。つらいことがあったのだろう。たった一人で知らぬ土地にいるのだから、つらくないはずがない。しかし、それを知るには距離が離れ過ぎていた。こちらからメッセージを送るにも遠過ぎる。

二人は互いに、互いの姿と出会って心の慰めにするしかなかった。

そして、今夜もフォニはザクリの姿と出会うために糸をくった。

異変に気づいたのは、もうすぐザクリに辿りつくところまで来たときだった。

暗闇の中で寒気を感じ、フォニは立ち止まった。そして、前方へ続くはずの光の糸を目で追って、驚愕する。

光の糸が、目の前の暗闇に飲み込まれていた。

今まで、周囲が暗闇ばかりでも、彼方へ延びていく光の糸ははっきりと見えていた。ところが今は、暗闇

が靄となつて光の糸の行く先を覆い隠していた。

恐る恐るその靄の中へ手を伸べてみると、ひやりとした冷気が纏わりつき、全身がその気配を拒むように鳥肌を立てた。先へ進みたいと思うのに、身体は竦んで言うことを利かない。

幾度か先へ進もうと試み、そのすべてが徒勞に終わるや、フォニはおもむろに目を開けた。

ベッドを降り、目的を一つひとつこなしていく。

そうして夜が明ける頃、フォニは人知れず村から姿を消した。